

第4節 第21回徳島県中学校同和教育研究大会公開授業

1 道徳教育とは人間教育そのもの

第25回全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業が終わったときの感動をH夫は、次のように記している。

【富田中学校での授業、全国大会の授業のことが脳裏に焼き付いている。僕たちが本格的に部落問題の学習に取り組みだしたのは、2年の1学期途中だった。もう1年と6ヶ月ぐらいが過ぎている。当時を思い出せばなかなか発表できず、うわべだけの言葉ばかりだった。しかし学習を続けていく中で何かが変わっていった。しだいに自分の意思で発表する人が増え、森口先生を中心として大きな輪となって3年生を迎えた。本当に3年生の仲間はすごいと思いました。この学習に全く無関心だった僕も、次第にこの学習を自分自身の問題として考えていくようになった。】

僕は今まで頑張ってきた自分に自信を持って全国大会の日を迎えた。授業の始まる前、僕は二つのことを思っていた。一つは「僕たちの学習は決してうわべだけのことを言っていない。みんなの本当の思いをぶつけあつた学習を積み上げてきたんだ」ということだった。もう一つは「この僕たちの学習を真剣に共に部落問題を解決していくんだという、はっきりした人間としての願いをもつて見てほしい」ということだった。12時50分、僕たちの授業は始まった。みんなの発言に胸がいっぱいになった。本当にすごい仲間と授業ができたことが、うれしくてしかたがなかった。授業が終わったとき、みんなの顔には笑みがこぼれた。僕はあのさわやかな笑顔を忘れない。】

まさに感動の連続、授業をやらせてもらえた「よろこび」に浸り続けた授業であった。

その授業後、その授業の指導助言者として全国大会に参加されていた文部省（現・文部科学省）の道徳教育担当教科調査官の横山利弘先生（現・関西学院大学教授）が是非とも話がしたいということで、別室で約1時間ほど話をした。そのとき、横山先生は言われた。

「いつまでもあの子どもたちとつながってくださいよ。そして本当に部落差別をなくしていくために頑張っていきましょう。」

そんな会話の中で、様々な思いを語ってくれた。

「私は兵庫県の人間なんだ。学生時代から部落差別について様々な怒りを持ってきた。まだまだ差別の現実は厳しいものがある。大切なのはこれからなんだ。あの子らが傷ついていくことのないように、しっかりとつながっていく、見届け支えていく関係を持ってくださいよ。」

私は横山先生の言葉に胸がいっぱいになる。横山先生の思いがたまらなくうれしかったし、道徳教育に対するイメージが大きく変わっていった瞬間であった。このとき道徳教育とは、まさに人間教育そのものなんだと思った。

2 何でこんな授業ができるんだろうか

そんな全国大会の授業での感動が続いていたおり、何日かが過ぎてからだった。部落出身教師である一人の仲間と電話で話をしたとき、こんな話をしてくれた。

「この前の授業、よかった。ほんまにうれしかった。でも、子どもたちが部落問題について思うこ

とをどんどん語っていく中で、授業を見ていた先生から、『何でこんな授業ができるんだろうか』という話と、『この先生は違うけん』という話が聞こえました。違うというのはとっさに部落を指しとるなあと思って、口惜しい思いになったんよ。ほんまに情けない話よ。痛みをもつともんだけが頑張ったらしいんじゃという意識があると思う。』

ただそれだけのことであるが、張り詰めていた力が抜けていくような衝撃を受けた。頑張ってもこういうふうにしか思われんのか、そんな見方しかされんのかという気持ちがこみ上げてくる。

そのとき一番に思ったことは、結局板野中学校の生徒たちが頑張ったことも、部落の子どもたちだから、あんな思いを持っているんだという感じで見られていくということだった。

同和教育は部落の人間が頑張ったらなくなること、同和教育は同和地区を持った学校が頑張ってやっていく教育、そんな意識が心無い囁きを生んでいくということをしっかりと訴えていかなければと思った。そして、今こそ自分の人間としての値打ちが問われていると思った。

今もある差別の現実とは、部落差別を部落という可哀相なところに生まれた人たちの問題という意識でいる先生方の存在であり、自分自身がある意味で差別の塊であり、その自分自身の差別意識を洗っていくことが、この教育の一番大切な部分であるということがなかなかわからていない現実である。そんな悲しい現実をしっかりと訴え、本当に差別をなくしていく教育を徹底的にやっていきたいという思いが、当時の私を支えていた。

また、私には同和教育に自らのすべてをぶつけて、共に取り組んでくれるすばらしい先生方の励ましがあり、私を信じ、部落解放に向けて、共に歩き続ける生徒たちの存在があった。

私は生徒たちに私の思いをぶつけていった。我々が求めてきた部落問題学習の本質を多くの先生方に届けていく授業実践をやっていこうという思いが、生徒たちの中に沸き起こっていく。私にあっても生徒たちにとっても、このとき部落問題学習とはまさに部落差別をなくしていく闘いになっていたように思う。

3 悲しみが見えないのでは、教育はできない

折りしも11月19日は、第21回徳島県中学校同和教育研究大会が板野中学校で開催されることになっており、私にしても、生徒にても、公開授業の日をまだかまだかと待ちこがれるようにして、その日を迎えるようになる。

ある生徒が言う。

「先生、教室だったら、いくら先生方がきてくれても、100人ぐらいしか見ることはできませんでしょう。3Bだけ特別に体育館を使わせてもらったらどうですか。」

そんな声が真剣に囁かれるように、生徒たちはこれまでの取り組みを参観の先生方に語って聞かせるという想いでいた。

いよいよ11月19日、大会当日を迎える。その日は2年間の全体学習の成果を踏まえて、『水平社宣言讃歌』（西口敏夫）の学習に取り組む。『水平社宣言讃歌』に寄せて部落問題学習について思うことが、次から次へと語られていく。本当の思いを語り合う「よろこび」、仲間と心を通わせていく「よ

ろこび」を生徒たちは満喫しているようにも思える。

そんな中で板野郡同和教育研究大会の公開授業で、心の友、心友をいっぱいいくつっていきたいと語ったE子が次のように訴えた。

「全道研（全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業）の終わったときに先生が、『先生が部落の人だからあんなに頑張れて、あんな授業ができるというような囁きをした先生がいた』と先生の友だちから聞いたと言っていましたけど、私たちの中には部落に生まれなかつた子もいるし、部落に生まれて悩んでいる子もいるけど、そんなこと関係なしにみんなでこの学習に必死に取り組んでいるのに、部落に生まれなかつた子は、部落問題をうわべだけで取り組んでいるように言われたみたいで、それを聞いたときすごくやしかつたです。」

その思いに発言が次から次へと重ねられていく。その中で、全国大会のとき、一番に部落問題学習への思いを語ったN子が、その怒りをぶつけるかのように語り出す。

「私たちがあれだけ一生懸命頑張って発表して、周りの人とかがものすごい拍手をくれて胸がいっぱいになっていたあの中で、そんな人がおったと思ったらすごいショックでした。その人たちはちゃんと部落問題について学んでいなくて、学ぶ環境も周りになかったと思います。私たちから言わせてみたら、その人は無関心な人というのもあるけど、将来部落問題に対する本当のことを知らないでずっと生きていくのは人間として惨めで、ある意味で人間としてかわいそうだと思いました。」

またその思いにつなげて、K子は次のように語る。

「昨日、佐藤文彦先生の書いた本を読んでいたら、本の中に『一見無邪気に見える子どもたちの表情の奥にある悲しみが見えないのでは教育はできない』というのがあって、その言葉がすごく心に残りました。やっぱりそういう心の奥まで悲しみが見えなかつたら、同和教育はやっていけないんだと思いました。」

そして、常に自分の一番苦しい部分を友だちにぶつけて、必死に頑張ってきたY子はこう結んだ。

「この前の授業のときも言ったけど、部落問題の学習に取り組んできたことによって、大人だけでなくいろんな先生の裏側まで見えてきて、先生というのは尊敬するものという気持ちもあるけど、部落差別をしている先生は自分が教えている生徒まで結局差別していることになるでしょう。だから、先生不信みたいな感じになってきたんだけど、よく考えてみたら、私たちは森口先生に会えてこういう授業をみんなでいっしょにやれたから、ちゃんと差別の本質までわかっているけど、その先生たちは自分のおじいさんとかおばあさんとか、親から部落の悪いイメージを吹き込まれたままで何が何だかわからない状態で教師になって、そのイメージをぬぐいさることができない状態でいるんじゃないかなと思うんです。」

だけどこの部落問題というのは考えてみれば本当におかしいことで、アメリカとかで人種差別とかがあるでしょう。それって見た目で黒人か白人か違いがわかるでしょう。その差別も絶対におかしんだけど。でも部落差別ってほんまに区切りがあるように見えてないように思うんです。先生から『ほんまに部落に生まれたと思っていてもその証拠がどこにも見つからなんだ』という話や、『自分が部落でないと思うっていても自分が部落でない証拠もどこにも見つからなかつた』という話を聞いたことがあるけど、ほんまにそうだと思うんですよ。何かその人の血が違うわけでもないのに、

ほんまに自分が部落なんかどうか決定的な確証もなしに、人が勝手に『あの人部落で、あの人部落でない』と言って差別していくということはほんまにおかしいことだと思うんです。」

4 部落に対するマイナスのイメージしか教えてもらわなかつた

そんな語り合いの中で、参観者の心は大きく揺さぶられていくが、仲間の思いや訴えをまとめるように、部落出身のM夫が切々と語っていく。その発言は部落問題学習の本質を訴える発言となる。「涙を流すことではなく、自分が部落に生まれたということを誇りに思うことによって、この学習は人間としての本当のよろこびをつかんでいくことができるし、より人間としてすばらしい生き方を求めて頑張ることができるから、もっともっと早い時期に自分自身が人間らしく生きるためにこの学習を捉えて、一生懸命にこの学習に取り組むことができていたら、もっともっと自分自身は成長していただろうし、もっと早く変われたと思うんです。

小学校の頃や中学校1年生のときだったら、僕自身真面目に取り組むこともなかつたし、授業を真剣にする姿勢も周りになかっただし、何かうわべだけで終わっていたような授業だって、絶対何も進歩のない授業だったと思うんです。でも中学2年生から頑張ってきた今の自分を見ていると、すばらしく進歩することができたと思います。僕は僕自身が部落に生まれたと知ったとき、ものすごいショックが僕の中に沸き起こってきたんです。《…中略…》

やっぱり小学校のときにもちゃんと学習して、中学校1年生のときにももっとちゃんと学習していたら、こういうショックも受けなかつたと思うし、今僕たちが続けてきたような学習をもっと昔から続けていたら、部落差別というものはもっともっと小さいものになっていたと思うんです。ただ時間をこなすうわべだけの授業だったら、絶対この先なんぼ部落問題の授業をやっていっても、やつたというだけで生徒の中には、部落問題を部落という惨めなところに生まれた人の問題としてしか捉えられない授業となって、本当の意味で差別をなくしていく授業にはならないと思うんです。

僕たちが中学2年からやってきた本音の部落問題学習をこれから先も大切にして、絶対部落差別をなくしていくかなければならないし、大きくなつても絶対差別者にならないようにしていかなければいけないと思います。」

この授業は、こういった発言が繰り返される中で、50分の時間が過ぎていく。50分という時間の短さを思う。

教師がただ一方的にしゃべり続ける授業というのは、生徒たちにとって退屈なものとなって、何度も時計を見てまだ終わらんのかという思いになっていく。しかし、生徒が一人一人の思いを大切に、このことをみんなと語り合うんだという中で、思いをつなげ合っていく授業というのは、あつという間に終わる。

この公開授業は、生徒と教師が一体となって、あくまでも生徒たちがつくって学習が、人間としての生き方を求めていく道徳学習や人権・部落問題学習のあり方であると訴えている。その授業記録のすべてを掲載する。

【授業記録】第21回徳島県中学校同和教育研究大会公開授業

主　題 「誇りうる生き方を求めて」

資　料 「水平社宣言讃歌」（西口敏夫）

1991年11月19日(火)第5校時

徳島県　板野中学校 3年B組

授業者　森 口 健 司

1 今日の私たちは準優勝どころか、優勝、ついでに全員にMVPを贈りたい

T 1: まだ少し時間があるんですけど、この前の全国大会（第25回全日本中学校道徳教育研究大会徳島大会特別公開授業）の日に書かれた生活ノートを紹介して、思いを新たに今日の50分の授業頑張りたいと思います。《1991年10月31日木曜日、今日のこの日は忘れることができないだろう。「こんな授業、二度とできないかも知れない」と思っていた板野郡同和教育研究大会の授業さえ影が薄くなってしまう程の授業だった。昨日このノートには「緊張もプレッシャーもない」と書いたけれど、さすがに体育館に入った時は少しひびって、それでも隣のO君としゃべったり、緊張のせいか顔がこわばっていたH君をひやかしたりしていたら、いつもみたいな気分になってきて安心した。おまけに授業が始まった時にはやる気がすごい出てきて、何かわくわくしてきたくらいだった。そんな中で始まった授業、私は「今日こそ発言のスタートを切ってやる」と意気込んで挙手しようとしたら、ほとんどの子が挙手していて驚いた。いつもは発表なんてあまりしない子も挙げていて、「負けられない」という気持ちになった。でも、実のところなんか意見がありふれている感じで「こんなんで大丈夫かな」と思っていた。それがこんな授業になった。そのことがうれしい。この授業に火をつけたのは、やっぱり部落問題学習のことを出したNさんだと思う。そして、今日は学年全体で部落問題を学習してきたからこそ成り立ったんだと思う。

これで私なりに同和教育はすべての教育の根幹にあり、教育そのものであるということが証明できた。10分ぐらいのオーバーで授業が終わった。もっともっと時間がほしかった。最後の礼が終わった時に周りから拍手が聞こえて、一回やんでいたのに退場の時また拍手してくれた。その拍手は私たちが体育館を出るまで続いた。とてもすっきりした清々しい気分になって、ついつい顔がほころんでしまった。『ナイン』について言いたいことは全部言ったという感じだった。板野郡同和教育研究大会の授業の終わったとき女子の何人かは涙を流していた。今日の授業には涙はなかった。みんなにこにこしていた。Iさんが言っていたように本当に輝いていた。今日の私たちは準優勝どころか、優勝、ついでに全員にMVPを贈りたい。それも互いの絆を確かめながらの優勝、要するに最高の試合ができたということで胸がいっぱいだ。この授業を3年B組のメンバーで受けられたことをとてもうれしく思うし誇りに思う。みんなに心からお礼が言いたい。徳島県中学校同和教育研究大会は「3年B組の授業」を期待してたくさんの人人がくるだろうけど、今日のような授業がしたい。そして、一生3年B組の絆を大切にしていきたい。先生もお疲れさまでした。そして、ありがとうございました。》

今日の授業、今まで取り組んだ2年間のいろいろな思いが集約した1時間になるように頑張りたいと思います。始めます。（礼）

T 2: 今日も一筋の光を求めて、みんなと部落問題に寄せる思いを語り合いたいと思います。今まで取り組んできた部落問題の学習、その学習に寄せる思いを込めてみんなで読み合った水平社宣言讃歌について、（板書「水平社宣言讃歌と私」）水平社宣言讃歌が私にとって何であるか。今までの学習を通してかつての自分、今の自分を振り返りながら、思いを語り合いたいと思います。

SE(女)この資料を一番最初に読んだ時は、なんかやたら長くて読む気もあんまりならんかって、2回目ちょっと読んでみた時は、やっぱり半分くらいで何が言いたいのかわからんかって、3回目ぐらいからわかってきたような感じがして、それでもまだよくはわかっていません。私にとってこの水平社宣言讃歌という詩は、今までの資料の中で一番難しくて、それでも一番身近に感じる資料です。

2 団結の意味を学ぶことがなかったら、このクラスも今のような姿にはならなかつた

HM(男)僕から見てこの水平社宣言讃歌は、僕がずっと前からいつも言っていることだけど、団結という言葉が好きで、その団結という言葉を改めてもっと好きになったような学習をした感じがします。団結は弱い者が強い者たちに勝つための一つの手段であるというのが好きです。団結の意味を学ぶことがなかったら、このクラスも今のような姿にはならなかつたし、このような見事な部落問題学習とかには取り組めなかつたと思います。

KK(女)さっきのM君の意見によく似ているんだけど、私も団結という言葉が好きになって、郡同研（板野郡同和教育研究大会公開授業）の時にはすごく燃えたんだけど、途中いろいろあってそれで全道研（全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業）の時にNさんとかが支えてくれたのがうれしかったです。

KH(男)水平社宣言讃歌は僕にとって、今までやってきた全部の資料の総まとめで、今までの資料のすべてがこの中にいる感じがします。

KU(男)この水平社宣言讃歌は文としてはあまりまとまってない感じなんだけど、何かすごい力強いものを感じて、これが部落の人たちの本当の思いであるし、人間としてのあり方もすばらしいあり方を述べていると思います。

SN(女)私もみんなと同じで今までいろいろな資料を学習してきたけど、「渋染一揆」にしても「意識の芽はえ」にしても、今までみんなと勉強してきた資料は、結局この水平社宣言につながっていたんだということが水平社宣言讃歌を読んでわかりました。

3 水平社宣言讃歌によって自分が部落に生まれたということを誇りうるときがきた

MM(男)この水平社宣言讃歌を勉強して、その前に水平社宣言を学習して何となくだけどその水平社宣言を自分の生き方につないでいったんだけど、この水平社宣言讃歌を勉強したら、水平社宣言に書かれていることは、もっと生活の上に生かすことがたくさんあるんだということがわかつてきたと思います。宣言の中に「われわれがエタであることを誇りうるときがきた」というのがあるけど、水平社宣言讃歌によって心から、自分が部落に生まれたということを誇りうるときがきたのだというように受け止められるようになりました。だからこの水平社宣言讃歌は僕が生きていくための支えとなり、また授業を頑張っていくためのエネルギーとなり、僕らにとって今まで学習してきた中で一番大切な資料になりました。

YI(女)この資料は私にとってとてもいいものになったと思います。今まで私が一番好きだった資料は佐藤文彦先生が書いた「美しさを求めて生きる人生を」というのが一番好きだったんです。今までやった資料で部落の人が自分たちのことを書いた資料は、何かその人の気持ちになりにくくてわかりにくいことがあったけど、この水平社宣言讃歌というのは、部落に生まれたとか生まれなかったとか、そういうこと関係なくて人間としてあたりまえのこと訴えていると思うんです。今までの学習で自分も成長してきたからこんな思いになれるんだと思うけど、絶対部落差別はおかしい問題なんだから、自分が部落に生まれた生まれなかったというのは関係なくて、一人の人間として考えてみたら、本当におかしい問題だということをわからせてくれた資料であり、すごく自分に一番近いというか、わかりやすい資料だったと思います。

HI(男)さっきのM君の発言につなげるような形になるけど、僕も水平社宣言や宣言讃歌を勉強してきて、自分の生き方の支えとなるものがいっぱいできてきたと思います。この資料を勉強していなかつたら、やっぱりずっと部落に生まれたことを隠していこうという気持ちが先にきて、部落差別とたたかって生きるというような思いは沸き起きてこなかったと思います。今、なぜかうれし涙というのか、何かそういうふうなのが流れてくるんだけど、やっぱりこの勉強してよかったです。

SN(女)I君を始めクラスのみんながいて、私が意見を言ったら、手を挙げて私の意見に付け足してくれたり、また誰かが言った意見に私が付け足したりして支え合っていて、そんな仲間ができたのはこの勉強をし始めてからで、水平社宣言讃歌という詩は私も一生大切にしていかなければならない一つだと思いました。

KH(男)僕もNさんと同じで、やっぱり自分が発言したらみんなもそれに応えて発言してくれることがとてもうれしいです。そしてこの資料がなかつたら差別の深い意味を一生わからずに過ごしていたかもしれません。

KT(女)私はこの資料やこの学習から、自分一人ではないということがわかりました。怒りを言葉に変えることで、相手に苦しみや悲しみが伝わってよりよい人間としての結び付きが生まれ、私たちは深い絆で結ばれていくことがわかりました。

TS(男)僕はこの学習の中から、このクラスはとてもすごいなあと思いました。3年生になったとき、始めの頃はあまり友だちもいなかったので不安だったけど、いろいろ溶け込んでいって郡同研（板野郡同和教育研究大会公開授業）や全道研（全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業）や、すごい授業ができるとでもうれしかったです。

YI(女)ちょっと資料から離れるんだけど、私たちはずっと2年生の時から部落問題学習に取り組んできて、今までの授業の中ではすごく悲しくて涙を流すこともあったけど、今のみんなは悲しみではなくて差別に対する怒りで燃えていると思います。そして、前の郡同研（板野郡同和教育研究大会公開授業）の時はこんなにたくさんの先生方はいなかったけど、この県同研ではこんなにたくさんの先生方が私たちの授業を見にきてくれたということは、私たちにはすごいそれだけの力があるんだだと思います。私たちには人を変える力があるから、絶対差別をなくすという自信も生まれてきました。やっぱり部落問題学習に取り組んできてよかったです。

4 今まわりには仲間がいるからこそ、僕も頑張っていける

MM(男)今のI君の涙のおかげで、みんなの支え合う関係がより強まり、またみんなが熱く燃え上がるることができたと思います。郡同研（板野郡同和教育研究大会公開授業）の時はまだ悲しみの涙だったと思うけど、今は違うと思うんです。今のI君もそうだったけどうれしくてたぶん僕と同じような考えを持っているんだと思うし、人の涙というものはたぶんうれしい時に流すからこそ、その一粒一粒の涙が一段とすばらしいものになるんだと思うし、悲しんでいるだけだったらこの問題は絶対に解決の方向には進まないといます。このクラスは絶対自分の意見を本音でぶつけ合う授業ができているし、もし嘘で言っていることがあったとしてもそれを見抜く力がみんなにできています。でも最初の頃や1年生の時なんかは、うわべだけでほとんど自分の心とかをみんなにさらけ出すことがなかったけど、この1年半みんなとこの学習を続けてきて、みんなをよりよくわかって信頼する関係ができる、『ナイン』でも習ったように絆とか団結とかの強さを知ることができたし、今まわりには仲間がいるからこそ、僕も頑張っていけるんだと思うし、たぶんみんなもそうだと思うから、まわりのみんなを信頼して頑張ってほしいです。

SN(女)私も昔は本当に恥ずかしいんだけど、差別に無関心で小学校の時とか中学校1年生の時とか勉強してい

たことはしていたんだけど発表あまりしなかったし、建前ばかりで差別はいけないとか、そういうふうなことばかり言っていたけど、2年生になって森口先生のクラスになって初めて差別の深いところまで知ったというか、そういう話し合いができるようになったんだけど、やっぱり始めの頃はしんどいなあと思って、私には関係ないって思いよったんだけど、2年生の全体学習の時に友だちが泣きながら自分が差別されてきたこととか、部落出身だということを打ち明けてくれた時から、やらなあかんと思ひだして、友だちをそこまで苦しめる差別を許したらいかんというふうに思うて、真剣に取り組んできたんだけど、やっぱり私一人では差別はなくならないけど、このクラスのみんなとだったら差別をきつとなくせると思います。

Y0(男)郡同研（板野郡同和教育研究大会公開授業）の時にI君とか、たくさんの子が涙を流したけど、今I君が流した涙はよろこびの涙に変わっていると思います。

5 そのときそのときに揺れている思いを語り合っていかなければ本物にはならない

HM(男)僕もNさんと同じで中2の時は発表をしていたかもしれないけれど、ただ紙に書いた文をただ読んでいただけで、心の奥底にある思いを語ったりすることはなかったと思います。今はそのときそのときに思うことを友だちの発言を聞きながら、感じること思うことを素直にまとめて発表するようになってきました。昔は授業前に書いた文章を読んできたので授業の中で沸き起こってきた僕の本当の気持ちをみんなに伝えることができなかっただと思います。この学習はただ文を読むのではなく、そのときそのときに揺れている思いを語り合っていかなければ本物にはならないと思います。それから今勉強しているのに下を向いていたりしている子がいたら、上を向いて発表してください。

YI(女)私は中学校1年生のとき、やっぱり道徳の授業とかもあったけど、必ず自分のクラスに部落の子がいてあんまりめったなこと言うたら、やっぱりやばいとか思っていて、結局綺麗事で何にも差し障りのないような言い方しか言えなかって、それで2年生の時に全体学習とかでまず本音を語るということを学んで、家のこととか一番自分の醜い部分をさらけ出し始めてそれからなんですよ、真剣にこの問題に取り組み始めたのは…。それで3年生になって振り返ってみたら、今はその部落の子とかそんなん関係なしに差別している社会とかに立ち向かっていけると思うんですよ。だからそう自分が変わったことが今はとてもうれしく思います。

K0(女)私は2年生に入って公開授業を始めた時、どうしてこんなことするんだろう。こんなことするからみんなは部落のことを知ってしまい、部落差別がなくならないんだと思っていたけど、そのまま放っておいたら、やっぱり昔の人たちが孫たちに間違ったことを教えてしまうから、今の私たちが正しいことをしっかりと真剣に勉強しなければいけないと思うようになってきました。そして、そうすることによって何年か先には部落差別は必ずなくなっていくと思います。

KT(女)誰でも自分の苦しい部分を語っていくということは苦しくつらいことだと思います。けどその苦しい部分を乗り越えて、本当の思いを語り合うことができるようになった時、私たちは本当の人間として生きることができるんだと思います。私も部落に生まれたけど、小学校5年生で自分が部落に生まれたということに気づいたんですけど、そのときは死んでしまいたいと思いました。今この部落問題の学習を積み上げてきて思うことは、歎くことばかりでなく怒りを持って、そしてその怒りを言葉に変えて訴え語っていくことによって、人間は本当に変われるということがわかりました。

6 部落の人だからあんなに頑張れて、あんな授業ができる

SE(女)全道研（全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業）の終わったときに「先生が部落の人だからあん

なに頑張れて、あんな授業ができるというような囁きをした先生がいた」と先生の友だちから聞いたと言つていきましたけど、私たちの中には部落に生まれなかった子もいるし、部落に生まれて悩んでいる子もいるけど、そんなこと関係なしにみんなでこの学習に必死に取り組んでいるのに、部落に生まれなかった子は部落問題をうわべだけで取り組んでいるように言われたみたいで、それを聞いたときすごくやしかったです。

KK(女)私もEさんと同じで先生から先生が部落出身の教師だからそんなに一生懸命なんじやと聞いたとき、すごく頭にきて生徒に本当の生き方を教えないかん先生が、どうしてそんな言葉が言えるんかなと思いました。

YI(女)私も先生から話を聞いたとき、すごくやしかったです。私たちはそんな部落に生まれたとか生まれなかつたとか関係なしに、この差別自体がおかしいことだし、このことは人間としてなおしていかなあかんことなのにと思いました。はっきり言って私はこの学習は、部落の人のためではなく自分自身のためにこの問題の学習に取り組んでいるつもりです。

7 すべての人が自らの生き方に関わり、生命に関わる大変な問題なんだと自覚していかなければならぬ

MM(男)その先生はたぶん、この学習の本当の重要性が受け止めることができていないんだと僕は思います。そして、人の生命に関わるという差別の厳しい現実を知っていたら、そんな情けない言葉は絶対出てこないと思います。この問題は部落に生まれたとか生まれなかつたということ抜きで、すべての人が自分自身の問題として考え解消に向けて取り組んでいかなければ、絶対解決していかない問題だと思います。人間は大人になると人間としてすばらしくなっていかなければならないのに、自分の差別意識は棚において人のことはとやかく言うけど、自分は差別の固まりという先生もいるんだなあと思うけど、僕たちはそんな大人や先生の差別意識とかに気づいてしっかりと訴えていかなければ、部落差別を始めとする差別は、その人の心からは消えないと思います。そのことは僕も僕の中にも差別意識があってこの学習をしっかりと続けていかない限り、その差別意識は年をますごとに段々と大きくなっていくし、根強く残っていくと思うんです。だから、僕自身この学習を大切に続けていきたいと思います。それと部落差別を残してきた大きな原因として僕は、部落問題に無関心な人と、この学習を正しく学習してこなかったおじいさんやおばあさんなど、この教育を受けることがなかった人たちの二つに大きな原因があると思うんです。その中である意味で一番こわいのが無関心な人だと僕は思うんです。部落差別をなくすために生きる人生はものすごいよろこびがあるけれど苦労も多いと思います。無関心な人は真剣に考えることが少ないとことだから、無関心な人のほとんどが、差別とたたかう側と差別する側に分けたら、差別する側に流されてしまうと思うんです。僕は部落差別に無関心な人を絶対につくってはいけないと思うんです。すべての人が部落問題を自分自身の生き方に関わり、人の生命に関わる大変な問題なんだと自覚していかなければならないと思います。僕はこの学習は人間としての本当の生き方をつかんでいく学習だと思うんです。僕はこの学習から自分に自信がもてるようになって、人前でしゃべるのも緊張感がなくなって、いつも思いきり自分の思いをぶつけていくことができるようになってきたと思います。絶対に負けないというものをつかむことができたと思います。

T 3: 今のM君の発言につなげてほしいです。

KH(男)全道研（全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業）の授業のとき、先生をあの人は部落の人だからといった人は、単に部落ということを知っているだけでこの部落ということが大変な差別の問題であるという自覚がないんだと僕も思いました。さり気ない言葉であってもその人を絶望させたり、大きく傷つけて死に追いやっていくことだって起こってきた、この差別の問題をもっともっと真剣に自分自身の問題として考えられないのかなあと思いました。

SN(女)私たちがあれだけ一生懸命頑張って発表して、周りの人とかがものすごい拍手をくれて胸がいっぱいになっていたあの中で、そんな人がおったと思ったらすごいショックでした。その人たちはちゃんと部落問題について学んでいなくて、学ぶ環境も周りになかったと思います。私たちから言わせてみたら、その人は無関心な人というのもあるけど、将来部落問題学習に対する本当のことを知らないずっと生きていくのは人間として惨めで、ある意味で人間としてかわいそうだと思います。

8 心の奥まで悲しみが見えなから同和教育はやっていけない

KK(女)昨日、佐藤文彦先生の書いた本を読んでいたら、本の中に「一見無邪気に見える子どもたちの表情の奥にある悲しみが見えないので、教育はできない」というのがあって、その言葉がすごく心に残りました。やっぱりそういう心の奥まで悲しみが見えなから同和教育はやっていけないんだと思いました。

YI(女)この前の授業のときも言ったけど、部落問題の学習に取り組んできたことによって、大人だけでなくいろんな先生の裏側まで見えてきて、先生というのは尊敬するものという気持ちもあるけど、部落差別をしている先生は自分が教えている生徒まで結局差別していることになるでしょう。だから、先生不信みたいな感じになってきたんだけど、よく考えてみたら、私たちは森口先生に会えてこういう授業をみんなでいっしょにやれたから、ちゃんと差別の本質までわかっているけど、その先生たちは自分のおじいさんとかおばあさんとか、親から部落の悪いイメージを吹き込まれたままで何が何だかわからない状態で教師になって、そのイメージをぬぐいさることができない状態でいるんじゃないかと思うんです。だけどこの部落問題というのは考えてみれば本当におかしいことで、アメリカとかで人種差別とかがあるでしょう。それって見た目で黒人か白人か違いがわかるでしょう。その差別も絶対におかしいけど…。でも部落差別ってほんまに区切りがあるように見えてないように思うんです。先生から「ほんまに部落に生まれたと思うていてもその証拠がどこにも見つからなんだ」という話や、「自分が部落でないと思うていても自分が部落でない証拠もどこにも見つからなかった」という話を聞いたことがあるけど、ほんまにそうだと思うんですよ。何かその人の血が違うわけでもないのに、ほんまに自分が部落なんかどうか決定的な確証もなしに、人が勝手に「あの人部落で、あの人部落でない」と言って差別していくということはほんまにおかしいことだと思うんです。

T 4：水平社宣言讃歌についてみんなにいろいろな思いを求めたんですけど、やっぱり今までに取り組んできたものがあまりにも大きすぎて、宣言讃歌と今までに学習してきた思いとがいっぱい重なっていきますね。これは今までの学習の中でも話したんですけど、先生にとってこの宣言讃歌は宝物なんです。西口敏夫先生の「水平社宣言讃歌」という一冊の本、大事に大事にしています。その本の中にある「よろこび」という詩はこの十年近く心の支えとしている詩です。みんなと部落問題学習を積み上げてきた一つ区切りとして、大きく飛躍し、より大きな峠を越える一つとして、この宣言讃歌を勉強してきたわけですけど…。讃歌に触れてでもいいです。今まで取り組んできた中で、全体学習やクラスの部落問題学習、そういったものを思い起こす中で私にとってこの学習とは何だったんだろうか。かつての自分、今の自分、自分自身の奥に流れてきたもの、今流れているもの、そういうものを思い返しながら部落問題学習に寄せる思いをあと残された時間、語り合いたいと思います。

MI(女)2年生からこの問題に取り組んで公開授業とかいろいろやってきたけど、さっきM君が言ったように私は下を向いたままで発表をしないときもあって、私を信じて必死に自分を語ってくれる人に応えず下を見ていることは、その人を絶望させ、その人を殺すことになると私も思うようになって、絶対私は信頼を裏切る、人を殺すような人間にはなりたくないと思いました。

9 私を変えてくれたのは、私の友だちの支えや励ましがあり、友だちを心から信頼できたから

CK(女)私は家庭訪問のときに先生から初めて、自分が部落に生まれたと聞かされて思いきり泣いてしまいました。それでも郡同研（板野郡同和教育研究大会公開授業）のときは自分の本当の気持ちをみんなにぶつけることができました。でもそのときもなぜか悲しくて泣いてしました。今はもうそんな悲しみや苦しみとかはなくて、この授業でも涙なんか流さずに発表できるようになりました。そんな泣いていた私を変えてくれたのは、私の友だちの支えや励ましがあったのと、友だちを心から信頼できたからです。私はその友だちに感謝しています。

MS(女)今までの私は部落に生まれたということは、隠さなければならないものとしか考えていなかつたけど、郡同研（板野郡同和教育研究大会公開授業）のときに私が部落に生まれたと言ったときみんなが支えてくれて、みんなが一つになれたなあとと思いました。私は部落問題を学習していくことは人と人とのつなげていくことだなあと思います。

TF(男)今までこの学習をしてきて、最初の頃は手を挙げて発表するときに、自分で手を挙げようと思っていたのも、10分ぐらい手を挙げることができなくてそのままみんなの意見を聞くだけだったんです。でもみんなの意見を聞いている中で、僕自身の中で変わっていくものがいっぱいあってやっと手が挙げられるようになつたんです。それでも長い時間が流れいくうちに部落問題をやっぱり自分には関係ない問題という気持ちが出てきて、また手を挙げれんようになって、今も頑張らなあかんという気持ちと自分には関係ないという気持ちの両方があるんです。だから、いつもこの授業の度に自分を反省しながら頑張ってきているんです。そんなときにある子が資料についての考え方をまとめる学習プリントを「そんなん適当に書いとけ」と言ったことがあるんです。そのとき僕はものすごく腹が立つたんです。その子と同じような気持ちにならんと心の底から腹を立てることができたのは、僕の中にまだ弱い部分もあるけど心の底から部落問題をなくしていなあかんという気持ちが強いんだと思って、この気持ちを大切に頑張っていかなあかんと思って今頑張っています。間違っていることを間違っていると言えることってほんまに大切やと思います。僕は間違っている友だちに「そんなこと言うな」と言えたことによって、自分というものに自信を持ちました。

HI(男)今日もまた一つ大きな峠を越えたと思います。やっぱりみんな頑張っているから、自分も胸張って頑張っていくことができるんだと思います。やっぱり「人の世に熱あれ、人間に光あれ」で、やっぱり人間みんないっしょなんだと思います。部落に生まれた部落に生まれんかったということにこだわるのではなくて、一人の人間としてこれからもずっと下を向かずに胸張って頑張っていきたいと思います。そして、やっぱり何かしらんけどいつも涙が出てきてしまうんだけど、これからは涙を流さないようにずっとこの学習やこの出会いを大切に、ずっと将来も頑張っていって、この3年B組の絆というものをいつまでも持ち続け頑張っていきたいと思います。

SF(女)私はこのクラスになってから、中1のときにいじめられた子に今も変な目で見られているということをよく話したんだけど、それってすごい私の誤解だったんです。この前その子と自転車置き場で会ったんだけど、その子が話し掛けてきてくれてなんかその子がすごい変わったなあという感じがして、すごくうれしくて何か私もその子のことすごい悪い目で見てたけど、それってすごい私が誤解していたんだと思ったんです。ある意味で私がその子を避けて反対に仲間外れにしているような感じだったけど、その子が話し掛けてくれたときに、この子はこんなに変わっているのに、私の勘違いでこの子を逆に苦しめていたんじゃないかなって、すごく自分の狭い心が情けなくなつて自分の思ってきたことを反省したんです。そして、ほんとは

公開授業とかがすごくいやだって、公開授業のときも何も考えずにほんやりしていることがあったんです。
でも3年生になって森口先生のクラスになったときに、IさんやNさんやM君とかいろいろな人がすごい発表して授業中胸がいっぱいになってきて、心から私も頑張らないかんと思うようになってきたんです。ほんとにIさんやNさんやクラスのみんながいてくれて私もこんな考えがもてたんだなあと、すごくみんなにお礼が言いたいです。

YN(女)2年生から取り組んできた全体学習を始めとする部落問題の学習は、私に勇気を与えくれました。その中でいろんな友だちが自分をさらけ出して語ってくれているのに、私は下を向いたままずっと黙っていました。それが今では発表することはまだまだ難しいけど、語ってくれる友だちの言葉を自分なりに一生懸命に受け止めることができました。それが私にとって一番うれしいです。

10 人間として堂々と生きていくよろこびをくれたのは、先生や3年B組のみんな

JK(女)2年生から部落問題の学習をしてきた中で、私の心も大きく変わったと思います。自分が部落に生まれた人間として、自分自身の本当の気持ちをぶつけるような発言はできませんでした。でもこの前の全道研（全日本中学校道徳教育研究大会特別公開授業）のとき、このクラスのみんなに自分が部落に生まれたことを打ち明けました。自分の心の奥にある本当の思いを語っていくことにより私は、人間としての本当の生き方をつかんでいくことができるんだと信じたからです。本当のことを訴えていくことはすごく勇気がいったけど、みんなが私を思いきり支えてくれました。あの授業の後、私は本当の友だちができたんだと思いました。自分の心を締め付けていた重苦しい部分を語ることができ、これから的人生を人間として堂々と生きていくよろこびをくれたのは、先生や3年B組のみんなが支えてくれたからだと思います。

KT(女)私はずっと前2年生のときは、自分には語ることはできないんだと信じていて、それを理由に発表することから逃げていました。それで繰り返し繰り返し発表できる子や語れる子がうらやましいとずっと思っていたんだけど、でもそんなことうらやましいと思うのがおかしいと思いだし、自分にもできないことはないんだと信じて発表したら、昔のことが嘘のように発表することができるようになりました。今はこうやってこんな大勢の人の中でも手を挙げて発表できるようになりました。まだ手を挙げることができていない人も、絶対できることはないので一生懸命手を挙げて発表してみてください。

T 5：はい、頑張りましょう。

11 周りがしらけていたり、共に頑張ろうとする思いがなかったら、絶対に立ち上がるものではない

KK(女)部落に生まれたというとても苦しいことをみんなに語っていき、自分自身が人間として胸を張り堂々と生きていくことができるかどうかは、周りのみんなの取り組んでいく姿勢や雰囲気で決まってくると思うんです。いくらその人に勇気があったって、周りがしらけていたりみんなで共に頑張ろうとする思いがなかったら、絶対に立ち上がるものではないし、語ることもできないと思うんです。一人一人の仲間を支える周りの雰囲気がとても大切だと思います。みんなで一人一人を大切にしていく、よりよい雰囲気を作っていくことができるよう頑張っていきたいです。

MO(女)私はこの前、クラスの中で部落問題について話し合っていたときに、「自分の中にはおじいさんとかおばあさんが差別ってきて部落の人を苦しめてきたという、人を差別してきたという血が混ざっているのがいやいや…」と言ったときに、Iさんとかが「この勉強を徹底的にしていったら、そんなこと言うのがばかりしくなってくる。OさんはOさん自身でしかないんで…」と言ってくれたのがとてもうれしかったです。今までこの学習をしてきて私は差別していないと思っていたんだけど、この資料を読んで自分の中にものす

ごく差別していたところがあるのに気づいて、自分の中にこんなに差別意識があるのに、何かずっと無関心だったことが恥ずかしかったです。

12 マイナスをプラスに変え、自分をより大きく成長させていくことを教えてもらっている

MM(男)涙を流すことではなく、自分が部落に生まれたということを誇りに思うことによって、この学習は人間としての本当のよろこびをつかんでいくことができるし、より人間としてすばらしい生き方を求めて頑張ることができるから、もっともっと早い時期に自分自身が人間らしく生きるためにこの学習を捉えて、一生懸命にこの学習に取り組むことができていたら、もっともっと自分自身成長していただろうし、もっと早く変われたと思うんです。小学校の頃や中学校1年生のときだったら、僕自身真面目に取り組むこともなかったし、授業を真剣にする姿勢も周りになかったし、何かうわべだけで終わっていたような授業だって、絶対何も進歩のない授業だったと思うんです。でも中学2年生から頑張ってきた今の自分を見ていると、すばらしく進歩することができたと思います。僕は僕自身が部落に生まれたと知ったときものすごいショックが僕の中に沸き起こってきたんです。それはそれまでに部落のことなんかを小学校の高学年頃から教えられていたけど、部落の悪いイメージだけしか心の中になくて、とにかく部落というところは差別されて惨めなものとしか授業で教えてもらってなかつたから、あんなショックがあったんだと思うんです。今考えてみると部落に対するマイナスのイメージしか教えてもらわなかつたからそうなつたと思えてくるんです。でも今はマイナスをプラスに変えるというか、自分をより大きく成長させていくことを教えてもらっているように思います。やっぱり小学校のときにもちゃんと学習して、中学校1年生のときにももっとちゃんと学習していたら、こういうショックも受けなかつたと思うし、今僕たちが続けてきたような学習をもっと昔から続けていたら、部落差別というものはもっともっと小さいものになつていていたと思うんです。ただ時間をこなすうわべだけの授業だったら、絶対この先なんぼ部落問題の授業をやっていっても、やつたというだけで生徒の中には部落問題を部落という惨めなところに生まれた人の問題としてしか捉えられない授業となつて、本当の意味で差別をなくしていく授業にはならないと思うんです。僕たちが中学2年からやってきた本音の部落問題学習をこれから先も大切にして、絶対部落差別をなくしていかなければならぬし、大きくなつても絶対差別者にならぬようにしていかなければいけないと思います。

13 お母さんやお父さんの方から部落問題のことを話し掛けてくれるようになってきた

RS(女)部落問題を学んできて私は変わつたと思います。1年生のときにお母さんとかお父さんの前で部落問題の話をしたとき、お父さんもお母さんもとてもつらそうな顔をしたから、もうこのことは絶対口にしないと思っていたけど、この頃だったらお母さんとかお父さんの方から部落問題のことを話し掛けてくれるようになりました。私は部落問題の学習は人間の本当の生き方をつかんでいく学習だと思います。

KU(男)この学習をするまでは、クラスの友だちでも言葉の上の仲間という感じで、よく知らない友だちもいたんだけど、この学習をしてきて一人一人が自分の存在を自覚してみんなが助け合う雰囲気ができているから、本当の仲間というのが何であるかがわかってきて3年B組のみんながすごい固い絆で結ばれたと思います。

SE(女)この学習をしてきて私ははっきりと思ったことは、人を変えていくのは周りであつて、自分が変わるもの周りの影響があつて変わっていくんだと思いました。この学習のおかげで私たちは何かすごい絆というか、切つても切れない結び付きができたと思うし、このメンバーだったら高校へ行つて離ればなれになつても、掛けそなつたらまた会つて自分のことを言い合えて支え合つていけるという自信があります。

MT(男)2年生の最初に先生と出会つて、そのときに最初先生が「わしの目を見い」と言うて「目を見て話す

るもんじや」と言うて、先生の目を見ていてこの先生はどこか違うなあと思いました。それでいろんな資料を勉強していく中で最初の方は、何か自分の書いていることでも発表しようと考えて、震えながらでも手を挙げて発表していたんだけど、繰り返し授業があった中で発表しないで授業を終わったら楽だって、その後の授業も発表せんと黙って下を向いて授業を受けたら楽だって、でもこのままずっとおるんではあかんなあと思って、何回か手を挙げて言おうと思ったんやけど、なかなか手が挙がらないでいたんだけど、差別は絶対許したらあかんし、周りの雰囲気に流されて部落の悪口を言う人間に絶対ならないためにも、楽な道を選ばずに僕自身を鍛えるためにも発表していかなあかんと思うし、その頑張りが大きくなつたら、周りの雰囲気に流されないような人間になつていくことにつながると思います。

KM(女)私はこの学習に取り組んでなかつたら、差別意識があつてずっと差別していたと思います。それでこの教育に取り組んできつ少しずつだけど差別意識がなくなってきたと思うから、この学習に取り組んできつよかつたと思います。これからもこの学習に取り組んでいきたいと思います。

SN(女)道徳教育の全国大会のときに、私の友だちが一人手を挙げられなかつたと言って、すごい気にしつたんだけど、それでみんなのこと裏切つたことになるとか言うて、すごい気にしつたんだけど、それで「今度頑張つたらええで」と言うたら「今度頑張る」というふうに言よつて、それで今発表してくれてすごくうれしいです。

KT(女)下を向いているのはやめてください。何も逃げることもないし、何もおそれることもないと思います。緊張はみんないつしょだと思います。今日自分は手をあげられなかつたと過去形にしないで、この場で今という瞬間を大切にして語つてほしいと思います。

KN(男)僕は2年生のときは、部落問題とかはどうでもいいと思っていました。全体授業のときでも先生に当たられて「ああ、いややなあ」と思いながら、学習プリントを見ながらでしか発表できなかつたけど、今はこの3年B組になつてから下手でも自分で下を向かずに発表できることができたのがうれしかつたです。

KK(女)50分という時間はすごく短いような気がします。私はもうだいぶ80%ぐらい、私の心は変わつてゐるけど、まだ変わっていないところもあると思うのでB組のみんなといつしょに変えていきたいと思います。それで私のお母さんとか家族の心も変えていきたいと思います。

14 今ここにおいでる先生方も、この火を絶やさずはずつと差別解消の日まで頑張つてほしい

YI(女)もう時間がきてしまつて言いたいのに言えなかつた人もいると思うんですよ。だけどこの3年B組だつたことを誇りにして、これからもずっと頑張つてほしいと思います。そして、部落に生まれた人はこれは絶対に隠して悲しんでそれですむ問題じゃないと思います。絶対この問題はおかしいから、絶対立ち向かつていかなければいけないと思います。そして、先生から聞いたことがあるんだけど、私たちがみんなで燃やし続けた部落差別をなくしていく光と炎を絶やすことなくずっと一生持ち続けて、差別解消まで共に向かつていきたいと思います。そして、この光と炎を大切に燃やし続け、私たちのこれから的人生において出会う人にこの光と炎をともし続けて、この差別解消の取り組みをすべての人の願いにしていきたい。そしてそのときには絶対日本から部落差別はなくなつてゐると思うんです。だから今ここにおいでる先生方も、私たちのこれだけ頑張つた姿を見てくれたんだから、この火を絶やさずはずつと差別解消の日まで頑張つてほしいと思います。

T 6：終わります。

5 生命を輝かせていく嘗み

人権・部落問題学習は、「絶対おかしい部落差別をなくしていくためにやっているんだ」という自覚をクラスの一人一人の生徒たちに、確かなものとして持たせていく必要が絶対ある。

人間にはよりよく生きたいという理性があり、感動する力があり、仲間の思いを受けて、その思いに応えていく力もある。そんな生徒一人一人の内なる力を大切にしていく学習、それがすばらしい成果を生んでいくのではないだろうか。

私はこの学習の中で、すばらしい先生方や生徒たちと出会うことができた。そして、この学習は、教師や生徒の生命を輝かせていく取り組みであると心の底から思うようになってきた。

高校入試が終わった翌日に、2時間学年で使う時間があった。その時間について当初全体学習についてさして乗り気でなかった先生が「中学校でのすべての教育の締め括りとして、最後の全体学習の時間にしましょう」という意見を出された。そして、卒業式の予行の前日に最後の全体学習を実施した。そして、その全体学習が感動的な卒業式につながっていくのである。

最後にその年度末にみんなでまとめた『峠を越えて』に、学年主任の仁木先生が、その1年間の嘗みを象徴するような文章を記しているが、その文章を引用させていただく。

【私たちは昨年度、1年間の部落問題学習を軸とした実践記録『峠を越えて』をまとめた。思いつきのようにしてできた冊子であったが、仲間との共有の財産として、何かにつけ今年度も活用することが多かった。

何よりも、毎日のつたない実践とはいえ、それが目に見える形で手にすることができる時の「よろこび」は大きなものであった。そんなこともあり今年度は当初より、とにかく年度末には一冊にまとめてみようという全員の了解のもとでスタートした。

板野郡同和教育研究大会、徳島県中学校同和教育研究大会の会場を本校で引き受け、全学級公開授業を行なうということで実践の材料には事欠かない1年でもあった。これを私たちは積極的に自分たちの問題として受け止め実践していきたいと思った。冊子にまとめるにたる実践に取り組みたいというのは一見本末転倒に見えるかもしれないが、それはそれでよかった。大げさに言えば、それで教師として充実した日々を送ることができ、力をつけることができればそれにこしたことはない。そんな思いでのスタートである。

それにしても、一言で言えばきつい毎日であった。昨年度より引き続いての部落問題学習は、まさしく教師としての生き方を問われる厳しいものであったように思う。生徒に教えられるということを実感した毎日であった。部落の生徒たちから本音を突きつけられ立ちすくんでしまうようなこともあった。

「先生、もうきれいな授業やいらん。本気で子どもと向き合う。」

これは、1学期当初の佐野先生の言葉であった。

涙を浮かべる子に、「先生、私せこい。あの子、意見発表会からおろそかと何度も思った。」
これは後藤田先生の言葉。

みんなが苦しい思いをしてきた。それでも私たちは逃げることだけはしなかったつもりである。

一人であれば逃げていたかもしれない。その方が楽だから。しかし、生徒たちの言葉が支えになった。それ以上に私たちはよき同僚に恵まれたことを何よりも「逃げなかつた」ことの第一の要因にあげる。疑問点は何でも出し合つた。顔が真っ赤になるようにしての議論もあった。夜遅くまで指導細案の検討を重ねる中で、一つ一つの階段を踏み締めるようにして今日までくることができた。みんなが力を合わせたから初めてできたことである。一人の力では何もできなかつたこと、それを改めて噛みしめる。

3年生としての進路指導においても私たちは、各学級の枠を越えて個々の生徒に焦点を当てて考えることを全員で確認し合いながら進んだ。全員が一つの目標に向かい、一人の生徒のことについて検討を重ねた。全員が心を一つにという、楽しい雰囲気の中で仕事を進めることができたのは、この1年間の部落問題学習で共にスクラムを組んできたという、我々の仲間意識があったからだと自負している。それにしてもすばらしい生徒たちと先生方であった。昨年度も同じようなことをかいたが、私個人の思いを言えば先生方に感謝の言葉の他はない。板野という初めての任地において、このような楽しく充実できた日々をつくってくれた生徒たちと先生方に、改めて感謝したい気持ちでいっぱいである。

大きな声で歌を歌うことのできた卒業式。式が終わった後、校庭で阿部先生のギターに合わせて歌った『友よ』(岡林信康)『乾杯』(長渕 剛)はいつまでも心に残るだろう…。

この合唱こそが私たち3年教師団と185名の生徒との2年間の生活や取り組みを象徴したものになった。あの歌声を忘れる事はない。

苦しい時、悲しい時にあの歌を思い出し、それぞれの道で精一杯の精進を重ねてほしいと思う。そして、またいつの日にかの再会を楽しみにして生徒たちに幸多かれと心から祈りたいと思う。】



1991年度板野中学校 3年B組